

2012 年度 海洋若手会夏の学校 活動報告

日時：2012 年 8 月 27 日-8 月 29 日

場所：京都市京都府立ゼミナールハウス

報告者：仁科 慧（京都大学大学院理学研究科 学生）

京都府京都市で 8 月 27 日から 29 日の間開催された海洋若手会夏の学校の活動報告です。海洋若手会夏の学校は毎年夏に全国の海洋関連分野を研究している若手を対象に行っている研究交流会です。例年、30～40 名ほどが参加し、一線で活躍されている研究者の講義を聴き、参加者による研究発表、および親睦会を行います。夏の学校の企画運営は学生が担っており、主な参加者は学生やポスドク・助教などの若手研究者です。今年の夏の学校では、普段中心となって参加している海洋物理学関連の学生から「海洋物理以外の海洋関連分野との交流をもっと活発にしたい」という声が多く見られたことを受け、海洋化学や生物、水産学、気象学分野の研究室にも参加を呼び掛けました。その一環として、文部科学省科研費新学術領域研究「気候系の hot spot」の中村先生、西井先生にもご協力をお願いし、気象分野への宣伝や参加者の旅費援助などのご支援をいただきました。その結果、地方での開催としては例年を上回る 40 名以上の参加者に恵まれ、普段以上に活発なセミナーとなりました。

一日目は京都市から宿泊施設まで移動し、施設の説明などを受けてから、各大学の学生がばらけるように各部屋に別れ、簡単な自己紹介などで交流を図りました。夕食を取った後、全体での自己紹介を兼ねて研究室紹介を行いました。10 以上の大学・研究室が、ユーモアに富んだ研究室紹介を行い、写真や動画、紹介者の様子を通して、各研究室の日常を垣間見ることができました。終始笑顔の絶えない和やかな雰囲気で行われ、交流の第一歩となりました。



京都府立ゼミナールハウス（宿泊施設）

二日目午前には京都大学海洋物理学研究室出身で、現在は海洋研究開発機構 (JAMSTEC) の地球情報研究センターに所属されている石川洋一先生にデータ同化についての講演を行っていただきました。データ同化とは、観測データと数値モデルの双方から情報を取り出し、統計学的あるいは力学的に組み合わせることで、最適な場や条件を求める手法で、天気予報の初期値や再解析データの作成に用いられます。石川先生は日本の海洋学におけるデータ同化研究の黎明期から第一線で活躍をされてきた方で、講演の内容はデータ同化の基礎や発展の歴史に始まり、最新の研究まで言及する充実したものでした。講演中もいつでも質問して良い、ということで、学生を中心に沢山の質問がなされました。例えば、近年全球に展開された Argo フロートによる水温・塩分の鉛直プロファイル観測が物理場の再現性や予報精度に与えるインパクトを調べた研究が紹介された際には、「データ同化の立場から船舶観測の重要性を示すことはできるのか」という質問が出るなど、観測データを中心に研究をしている学生も興味を持ってくれたようでした。また、海洋の長期再解析データを用いて、北太平洋の深層における昇温メカニズムを提示した研究に対しては、そのメカニズムをしっかりと理解しようと多くの学生が質問をし、活発な議論がありました。大気海洋の結合同化システムによる研究や、海洋の物理モデルを用いて生態系モデルのパラメーター最適化の研究など、近年増加しつつある、分野の垣根を越えた研究も紹介され、参加者の多数を占める海洋物理系の学生も大いに刺激を受けたことと思います。

二日目午後には学生の研究発表が行われました。衛星観測を用いた海面水温変動や熱フラックス変動の研究にはじまり、Argo データを用いた海盆スケールの鉛直構造や水塊形成に関する研究、沿岸域の前線をターゲットとした新しい観測手法であるバルーン空撮技術の研究、高解像度海洋再解析データを用いた物質輸送モデルの研究など、バラエティに富んだ発表が揃い、こちらでも活発な質問、議論がありました。今年の学生講演は、大気海洋相互作用、今や海洋学のインフラとなりつつある Argo データを用いた研究、沿岸の研究、海洋再解析データの応用研究と、昨今の海洋学における重要課題の詰め合わせとも言える顔ぶれが並んでおり、海洋学の諸分野における最先端で学生、若手研究者が活躍していることを感じさせる充実した内容でした。



二日目午後、学生による研究発表

二日目の夕方以降は懇親会が行われました。バーベキューとレクリエーションを通じて交流を深めつつ、色々な話題で盛り上がりました。特に船舶観測の経験がある学生からの船上での生活に関する話は、船舶観測の経験がない学生にとっては新鮮に感じられたことと思います。観測を終えて浮上してきた貴重な機器を探す際には学生が総出で目を凝らし、第一発見者にはご褒美がでる、などの観測の苦労話や、誰かの姿が見えなくなると船員・観測経験者に緊張が走る（海に落ちていたら大事件なので）、などの「船上あるある」話は非常に興味深かったです。楽しげな会話の横では、博士課程の学生や博士課程へ進学を決めた学生、若手研究者の中には、将来への不安や博士課程に進学する学生が減っている問題などについて話し合う人たちもいました。パーマネントの職の空きは少なく、短期契約のポストすら限られている厳しい現状では研究職に進むかどうか迷っている後輩を後押しできない、という意見もあれば、そのような厳しさはさておき、観測データの充実や計算機の進歩により海洋研究の幅はこれからますます広がっていく、というような研究の展望をもっと語ってもいいのではないか、という人もいたなど、熱い議論が交わされていました。

三日目は宿泊施設の後片付けをし、朝食をとったのちに解散、という流れで大きなイベントはありませんでしたが、集合写真を撮影し、帰りのバスに乗る前にはところどころでメールアドレスの交換が行われ、三日弱のセミナーが今後の交流につながっていくことを感じさせました。幹事校側としては頑張っ準備をしてきた良かった、と思える瞬間でした。また、夏の学校から二週間後の日本海洋学会秋季大会期間中に設けた若手の懇親会には、夏の学校の参加者を中心に40名弱が集まり、さらに交流を深めることができました。

最後に、今回の海洋若手会夏の学校に御支援くださった「気候系の hot spot」の中村先生、西井先生、各ワーキンググループの皆様にあらためて感謝いたします。ありがとうございました。